

# 〈短歌〉

— 全体講評 —

今回は、十代の若い作者とご高齢の作者が比較的多い印象がありました。十代の方々の作品は青春期のみずみずしい息吹にあふれているものが多く、部活動をはじめ若者の生きる風景があざやかに浮かんできます。また、ご高齢の方々の作品には、歌人としての表現や技巧の冴えを感じさせるものがありました。老いをテーマとする作にも前向きな心と動作を詠み込んだ作が多く、また風土や自然を歌柄大きく詠み込んだ作もあり、注目しました。

さらに、出産や子育て、教師の日々をモチーフとするなど、人生の青年期、壮年期を生きる方々の作品には、確かな手応え、重みが実感されました。

コロナ禍の社会状況がつづく中で、一首一首かけがえのない光を帯びています。その作品中から、短歌としての表現や視点に独自の何かを感じられるものを選出させていただきました。

山田 吉郎

## 【最優秀賞】

大山の嶺に礼をし稲を刈り刈り終へし田に父は礼をす

遠藤 寛

— 講評 —

霊峰大山に見守られ、稲の収穫に向き合う父の姿を詠んでいる。遠き日の父を回想しているのかもしれない。風土と融け合う人々の暮らしが伝わる一首。「礼」は「れい」のほか「みや（いや）」（古語）と読んでもよいだろう。

## 【優秀賞】

大寒に胸を反らしてラジオ体操青天に見ゆる飛行機雲一本

貝塚 よしたか

— 講評 —

「胸を反らして」という身体の動きが、大寒という季節感と相まってすがすがしい。さらに「飛行機雲一本」という描線の太い表現が新しく注目した。

## 【優秀賞】

鼻と口マスクで見えはしないけどあなたの笑顔いつも見えます

國近 優斗

— 講評 —

マスク生活がつづくなかで、見えなはずの「あなたの笑顔」が「いつも見えます」とはつきり言い切ったところが新鮮である。日常会話語が生きている。

## 【優秀賞】

現代文の授業はたのし李徴子の生きざま学び我が振りなおす

齋藤 奏音

— 講評 —

李徴子の中島敦の小説『山月記』の主人公で、この作品は国語教科書に頻出する。自尊心に身をほろぼす主人公への若い作者のまなざしが印象的である。

【優秀賞】

ヒマラヤシーダー伝い歩けば足元から樹の上からも音ぞ弾ける

中田 勇

— 講評 —

美しく端正な枝葉が印象的なヒマラヤシーダーを、「音」で表現したところがユニーク。字余りはありながらも一首全体の歌の調べがのびやかでよい。

【優秀賞】

卒業生を時間なくとも相手する在校生を指導しながら

本田 卓

— 講評 —

教師の日常は忙しいが、訪れる卒業生を「時間なくとも相手する」のである。それがまた作者の歓びでもあるのだろう。ここが一首のポイント。職業詠としての実感がこもる。

【優秀賞】

母の顔ほほ多みて見えある時は泣くが見ゆる遺影の写真

吉田 美代子

— 講評 —

母の遺影の前に、母の表情がそのときどきに変わり、心の会話がなされていくような一首。哀切ななかに心の慰撫されるようなおもむきが感じられる。

# 《俳句》

— 全体講評 —

令和元年度は表彰式が新型コロナ禍の影響で開催できず、令和二年度もコロナ禍で、表彰式も展示もできませんでした。今年もオミクロン株で日常に戻れません。吟行も出来ず、句会もネット句会で凌いでおります。俳句は密になる座の文芸です。句会の出句と選句によって文学的個性を高めたいものです。今年度は八十一名の方々の応募をいただきました。一時感染が急激に減少したこともあり、旅の自然を詠み、身近な句材も非日常の経験を生かしながらの表現がみられました。私は「俳句は対象の真実を印象として表現する詩である」と考えております。単なる報告ではなく、詩として表現しようと苦心された作品を選びました。

来年もまた応募下さいますよう宜しくお願い致します。

梶原 美邦

## 【最優秀賞】

振り上ぐる考の腕や飾臼

高浪 國勝

— 講評 —

臼は農家にとって神仏に近い神聖な道具であった。正月に笹を敷き、据えた臼に注連を張り、鏡餅を供え新春を祝うと、亡き父の餅を搗く若き腕が蘇った。

## 【優秀賞】

秋祭りコロナ気遣う太鼓の音

加藤 滋

— 講評 —

コロナ禍の日常が三年に及ぶ。感染予防の為にイベントは中止や縮小を余儀なくされる中での秋祭。密を避けねばという心が撥に伝わって太鼓の音が鈍る。

## 【優秀賞】

冬落暉川面を染むる老舗宿

高津 茂々乃

— 講評 —

県外を跨いで移動は避けるコロナへの対策が経済に大打撃を齎している。祖先代々繁盛して川面に映っていた旅館も、冬の夕日の中に沈もうとしている。

## 【優秀賞】

鄙の戸の留守を守宮にまかせけり

志賀 久一

— 講評 —

日本全国、今ではどの家でも鍵を掛けないことはないが、昔は都から遠く離れた田舎では鍵を掛ける家はなかった。夜や外出する時、留守番は守宮に頼んだ。

【優秀賞】

谷戸川の瀬音ひそやか寒の入り

下山 芳廣

— 講評 —

丘陵の小川の源流で森や沼の動植物を育む谷戸川が音をしのびやかに始める、三〇日間（一月五日頃の小寒から二月四日頃の節分まで）の寒に入る。

【優秀賞】

春を待つ最終バスの赤ランプ

野澤 星彦

— 講評 —

夜遅くまで、仕事に追われ、区切りをつけて、駅に向かう。途中バス停から最終便と思われる車が発った。尾灯の赤ランプが春の彩を滲ませていた。

【優秀賞】

海溝の怪魚となりて大昼寝

高橋 克

— 講評 —

人類は背骨に海を組み込み、海から陸に遣ってきたという書を読んでいるうちに、うとうと昼寝、水深六千 m 以上の海底に棲む奇妙な魚になってしまった。

【優秀賞】

背を正し名のるひ孫らお年玉

山崎 照子

— 講評 —

昔のお年玉は年霊で、その年の神が宿る餅であった。今はお金。曾孫たちは慣れ合いを他人行儀に切り替え、お年玉を貰う、真剣な態度で自分の名を告げた。

【優秀賞】

煩惱を真つ逆さまに滝落つる

中村 茂昭

— 講評 —

密教や修験道や神道などの滝行の体験があちこちで行えるようである。滝壺に入って、先ず煩惱が滝の冷水の衝撃を受け、耐えると次第に楽になってきた。

# 川柳

— 全体講評 —

川柳は生活の詩（うた）です。一句の中心に人間をずしりと据えて、森羅万象を描きます。ゆえにその傾向も多岐にわたります。ユーモア・ペーソス・時事・詩情…。どれも川柳の大切な基盤です。

その基盤を最大限に活かす形が「定型」です。五七五のリズムは、余分な表現をそぎ落とし、一語一語に深みを与えていきます。

全四十三句、皆さまの一句一句には、日常を深く見つめユーモアと人生の厚みをもって、定型詩・川柳を楽しんでいらっしやる姿がありました。コロナ禍でも楽しむ心を失わず、現況を句で決して責めない。人としての尊厳と、詠む心の滴りが輝く四十三句に出会えたことへ、深く感謝します。ありがとうございました。

やまぐち 珠美

## 【最優秀賞】

女から母へ船出の海満ちる

神宮寺 清文

— 講評 —

なんと雄大で、温かな応援句でしょう。身近な方の出産への一句と  
思います。女性の変化を「海満ちる」ととらえた詩情が読む人の心  
を揺さぶります

## 【優秀賞】

古希すぎて大器晩成まだ捨てず

小須田 壽久

— 講評 —

作者の心意気が熱を帯びて伝わります。一歩ずつ確かに歩む日常が  
浮かんでくる下五です。人生百年と言われる時代に「大器晩成」の  
一語が響きます。

## 【優秀賞】

薬手帳保険証持ちブチさんぽ

東 哲子

— 講評 —

川柳の切り口が冴える一句です。上の句と中の句から「ブチ散歩」  
へ転換、ユーモアの視座でご自身を見つめています。この視座こそ  
川柳の大人力です。

## 【優秀賞】

不器用でいつも消ゴム持って生き

小糸 藍子

— 講評 —

川柳は喻え（たとえ）の面白さが特長のひとつです。「消しゴム」は、  
人生のつまずきや間違えを懸命に建て直す処世への覚悟です。「持つ  
て生き」が輝きます。

【優秀賞】

自然には勝てぬ地球の間借り人

増田 千賀子

— 講評 —

時代を映し風刺する。これも川柳の髄です。「勝てぬ」に人間への警鐘を、そして「間借り人」で世相に寸鉄を打ちました。「地球」への謙虚を示しています。